

マダム・ド・ロングヴィルの生涯（承前）

進藤，誠一

<https://doi.org/10.15017/2332925>

出版情報：文學研究．45，pp.30-40，1953-03-10．九州文学会
バージョン：
権利関係：



マダム・ド・ロングヴィルの生涯

（承前）

進 藤 誠 一

三

前記のコリエー伯とギーズ公との決闘事件はパリ中の、いなフランス中の大評判になった。小唄が作られ、小説が作られる始末であつた。

小唄は次のようなものである。

Essuyez vos beaux yeux,

Madame de Longueville;

Essuyez vos beaux yeux,

Coligny se porte mieux.

S'il a demandé la vie,

Ne l'en blâmez nullement;

Car c'est pour être votre amant

Qu'il veut vivre éternellement.

美しいお眼の涙をお拭きなさい、

ロングヴィル夫人、

美しいお眼の涙をお拭きなさい、

コリニーは快くなつています。

かれが命乞いをしたからといつて、

怒つたりなすつてはいけません、

あなたの恋人であるためにこそ、

かれは永久に生きたく思うのですもの。

(Victor Cousin : *La Jeunesse de Mme de Longueville*, p. 257.)

小説のほうは作者不詳であるが、「アジエジランとイスメニーの物語」 *Histoire d'Agésilas et d'Isménie* とするものである。この物語のなかで、アジエジランとイスメニーとがコリニー伯とロングヴィル公夫人とを指していることは勿論であるが、そのほかにロングヴィル公、コンデ公夫妻（ロングヴィル夫人の実家の両親）、モンバゾン夫人（ロングヴィル公の情人）その他、前記のロングヴィル夫人誹謗事件の立役者たちはことごとく何かの名前で現れている。そのう

え、イスメニー（ロングヴィル夫人）とロクサーヌ Roxane（モンバゾン夫人）との容貌や性格も、まづたくその実在のモデルを忠実に写している。物語りの筋もほとんど事実のとおりに運ばれる。ただ物語では、アジェジランとイスメニーとが、早くから相愛の仲であり、イスメニーは両親の命令でやむなく、恋人をすててアミルカール Amilear（ロングヴィル公）と結婚したことになる。また問題の手紙も、実際はモンバゾン夫人が拾ったのであるが、物語ではかの女が偽造したことになっている。そして、物結は実説のとおり、アジェジランの死によつて終るのであるが、その死の床にイスメニーが駆けつけて、恋人の告別の言葉をうけ、その遺骸のうえにうち伏して泣き沈むことになっている。

このやうに物語には若干の虚構もあるが、それは一面から見れば、この事件について世間一般がもつていた見解を代表していたとも考えられる。つまり手紙の件はモンバゾン夫人の奸計によつてでつちあげられたもので、ロングヴィル夫人の身に覚えの無いことであるが、しかしかの女とコリニーとのあいだには、たしかに恋愛の關係が存在していたのだというふうに、世間では信じていたものと考えられるのである。このことは上記の小唄の内容からも裏づけることができるであろう。

（この物語に関しては Victor Cousin : *La Jeunesse de M^{me} de Longueville*, p. 257—266 参照。）

右のように小唄や物語に作られて流布されるほどであるから、この当時ロングヴィル夫人の美貌やそのギヤラントリーが世上でいかに評判されていたかを想像することができる。もつともギヤラントリーと言つても、このコリニーの問題のごときは、当時のフランスの社会としてはまことに罪の無いもので、この事件はその騎士道的な、ロマネスクな曲折によつて、むしろかの女の魅力を加えたに過ぎなかつたのである。

四

右の事件の起つた頃、ロングヴィル夫人は妊娠していた。かの女は一六四四年二月四日に女兒を生んだ。シャルロット・ルイズ Charlotte Louise, M^{lle} de Dunois と名づけられたこの女兒は生後一年余で夭折した。(一六四五年四月三十日。)その翌年、一六四六年一月十二日、ジャン・ルイ・シャルル・ドルレアン Jean Louis Charles d'Orléans, comte de Dunois と名づけられた男子が誕生した。

この男子を妊娠しているあいだに、夫ロングヴィル公はフランスの全權大使として、ヴェストフアリアのミュンスタールで開催中の列国會議に参加することを命ぜられた。時代はあの三十年戦争の末期で、フランス、ドイツ、スウェーデンをはじめ、欧州の列国が虚実をつくじて外交の駆け引きを戦わせていたのである。ロングヴィル夫人は妊娠中であつたので夫と同行することができなかった。分娩したのちも、急いで夫のあとを追わうとはしなかつた。實際、ランブイエ邸の寵児で、コルネイユやヴォワチュールなどにかしづかれていたかの女が、田舎くさいドイツの町で、外国の使臣たちがドイツ語やラテン語を話しているなかに乗りこむのは嬉しいことではなかつた。

かの女はできるだけ出発をおくらせたのち、一六四四年六月二十日に、継娘であるマリイ・ドルレアンを伴い、多数の従者に従われ——そのなかにはアカデミー会員のエスプリ Esprit や、高等法院判事のクールタン Courtin や、著述家のクロード・ジョリ Claude Joly のような知識人もあつた——行列はなやかにパリを出発した。途中の町々で大歓待をうけた。当時ライン地方に出陣していた有名なテュレンヌ將軍は、麾下の軍隊を戦闘隊形に配置し、かの女の面前で演習をさせた。テュレンヌが終生ロングヴィル夫人に思慕をよせていたことは有名である。

かの女は七月二十六日、途中まで迎えた夫ロングヴィル公とともに、はなばなしくミュンスターに到着した。かの女はその滞在期間を通じ、列国会議の女王であつた。かの女の魅力は列国の外交官と軍人たちを悩殺した。かの女はヴェストフリアでの追放生活をあまり苦にする様子を見せなかつた。かの女は日々各国の使臣と接見してかれらに満足を与えた。一人の外国使臣はかの女に、慰みのためにドイツ語を習われてはと勧めた。この挿話は早速パリのランブイエ邸に通報されて、サブレ夫人やモンソージエ夫人を大笑いさせた。

一六四六年の十二月に、ロングヴィル夫人の父コンデ公が病歿した。このことはかの女のパリ帰還を必要とする出来事であつた。そのうえかの女はミュンスターで妊娠していた。そしてかの女の母コンデ夫人は、娘がパリで分娩することをのぞんでいた。ロングヴィル公はやむなく妻をパリに帰すことに賛成した。一六四七年四月二十七日、かの女にミュンスターを出発した。そして途中いそぐことなく、ゆつたりとした旅行を続け——おそらくかの女の身体の状態を慮つたのであろう——五月上旬、まずコンデ家の居城のあるシャンティイに着き、次いでパリに帰つた。かの女はそこに前に増して多数の、熱心な崇拜者たちの群を見出した。

五

ミュンスターから帰つたばかりのロングヴィル夫人の境遇、その心情、その人気などについて、かの女と同時代に同じ社会に生活したモットヴィル夫人 *Mme de Motteville* の備忘録 *Mémoires* を引用した。

この公爵夫人は不在中もその一家のうゑに君臨し（訳者註、一家とはかの女の実家コンデ家を指す。かの女は結婚後

も実家の一員として気構えをもちつづけ、世間もまたそれを当然のことと見ていた)、また世間の一般が、かの女の賛同を最高の恩恵として切願していたのだが、パリに帰つて来ると、果して出発当時に見られなかつたほどの輝かしさをもつて社交界に現れた。その令弟コンデ公(訳者註、アンギヤン公は父のあとをついでコンデ公となつていた)がかの女に對していだいていた愛情が、かの女の行動や振舞いの後楯になつていたことではあり、かの女的美貌と才智のすばらしさが、その一族の徒党をいやがうえにも大きなものとしたので、かの女がしばらく宮廷に在ると、ほとんど全宮廷をひきつけてしまふのであつた。かの女はすべての愛慾的となつた。かの女の寢室は(訳者註、十七世紀では貴婦人の寢室はすなはちその客間であつた)すべての陰謀の中心となつた。かの女に好まれた人々はたちまち運命の寵児となつた。……かの女の明敏さ、かの女の才智、それからかの女の鑑識力についての定評、そうしたもののために、かの女はあらゆる教養のある人々から感歎された。そして人々はこの女から認められることだけで、世間の名声を勝ち得ることができると思いこんでいた。……要するに、その当時は、あらゆる榮達とあらゆる名譽と、そしてあらゆる恋愛沙汰が、コンデ公を首長とするこのブルボン一族にとり籠められていた、そして幸福もこの一族の人々の手から来るのでなかつたら有りがたいものとは思われなかつた、と言つことができる。(V. Cousin: *La Jeunesse de Mme de Longueville*, p. 293.)

このように人生の一切の繁榮と幸福とがかの女の身邊をとり囲んでいた。これほどの榮華と人氣とに酔わぬ女性は無いであらう。しかもかの女は夫に對しては全然愛情を感じていなかった。齡は二十八歳であつた。條件はそろつていた。かの女が美貌で才人のほまれの高いマルシヤック公 prince de Marsillac (のちのラ・ロシュフノー公爵 duc de La

Rochefoucauld）と深い関係に陥つたのはこの頃であつた。

マルシャツク公もまたフランス貴族としては由緒の深い、一流の家柄の嫡子であつた。一六一三年十二月十五日に生れ、若くして宮廷に出仕し、イタリアやフランドルに出征した。若き日のマルシャツクは騎士的情熱に燃えて、向う見ずの冒険とロマネスクな恋愛とに見をゆだねていた。リシユリユー枢機官に憎まれ、迫害されていたアンヌ・ドートリツシユ皇后に同情し、かの女と、その侍女でかれが愛慕していたオートフォール夫人 *M^{me} de Hautefort* とをひそかにブリュッセルに連れ出さうと企てたことがあつた。この企ては不成功に終り、かれは枢機官の怒りにふれて、望居を命ぜられたのであつた（一六三九—一六四二）。このようにアンヌ皇后に忠誠をつくし、リシユリユー枢機官にいらまれてきたのであるから、一六四二年に枢機官が死に、その翌年ルイ十三世もまた死に、四歳のルイ十四世を抱いて母后アンヌ・ドートリツシユが摂政となつたとき、マルシャツク公としては多大の恩賞を母后から期待することのできる立場にあつたのである。しかし不幸にしてかれらは母后に忠実であると同時に、マザラン宰相に反感をいだいていた。つまりかれもまた「驕慢な連中」 *les Importants* の一人であつたのである。かれはモンパゾン夫人やボーフォール公らを批判し、かれらの行動にくみしはしなかつたけれども、しかしかれらと絶交する気はなかつた。かれは「驕慢な連中」が処断されたときに、それに連坐はしなかつたけれども、マザランの憎しみをうけた。かれのために母后があつせんされる恩恵はマザランによつて婉曲に拒絶され、または妨害された。母後の慰撫と激励にもかかわらずマルシャツクは充たされぬ虚栄心のために次第に不平党に傾き、忠勤によつて獲得できなかったものを威嚇によつて獲得しようと考えようになつた。かれがロングヴィル夫人と親密な関係に入つたのは、このような心境においてであつた。かれ自身の備忘録が正直にこの間の消息

を語っている。

ロングヴィル夫人の美貌と、その才氣と、そのひとがらのもつすべての魅力が、夫人の好遇を期待しうるあらゆる人々をかの女に引きつけていた。多くの貴人と貴女たちが夫人の氣を迎えようとつとめた。このように夫人をとりまいてその愛顧をきそいあうことの楽しさのうえに、ロングヴィル夫人はそのころその家族のすべてと非常に親密であつたし、また令弟アングヤン公から深く愛されていたので、姉夫人のお氣に入りさえすれば、この貴人の尊敬と友情とが保証されたようなものであつた。多くのものがこのみちを試み、野心に他の感情を混えてみたが、みな失敗した。のちにフランス国元帥になつたミオツサン Miossens (訳者註、ミオツサン伯セザール・フェブユス César-Phébus, comte de Miossens は一六五三年に元帥となり、ダルブレ元帥 *maréchal d'Albret* と称した) が、いちばん長くねばつたが、やはりだめであつた。わたしはかれらの親友の一人であつた、でかれはわたしに自分の計画を話したものであつた。その計画を話したものであつた。その計画はまもなく水泡に帰してしまつた。かれはそれを認め、いくどもわたしにもう諦める決心をしたと語つた。しかし虚栄心が他のどんな情念よりも強かつたかれは、しばしば眞実をわたしにかくし、希望のあるようなふりをしたものだつた。実際には希望なんかありはしなかつたのだし、わたしには希望のあるはずが無いとわかつていたのだが。こんなふうで少し時がたつた。そしてわたしはついにロングヴィル夫人の友情と信頼とを、ミオツサンよりも有効に利用することができる確信を得た。わたしはかれにこのことをみとめさせた。かれは宮廷でのわたしの地位を知つていた。わたしはかれに自分のもうくろみを話したが、しかしかれに對する遠慮がいつまでもわたしを引きとめるであらうし、かれがわたしに自由をゆるしてくれないかぎり、ロングヴィル夫人と關係をつけること

をわたしは試みないであろうと言つた。白状するが、わたしはこの自由を得るために、わざと夫人に対してミオツサン
の感情を害するようにつとめた、もつとも真実でないことなど決して言いはしなかつたが。かれはわたしに完全な自由
あたえた。しかしこの関係のなりゆきを見たとき、かれはそれを後悔した。かれはその後まもなくたいへんな評判や、
たいへんな騒ぎでわたしたちの関係を邪魔しようとしたが、わたしの計画を変えることはできなかった。その後まもな
く、ロングヴィル夫人は、その夫ロングヴィル公が講和の交渉に行つていたミュンスターにむかつて出発した。（ラ・
ロシュフコーの備忘録の一六四六年の条。）

六

右のラ・ロシュフコーの備忘録によれば、かれとロングヴィル夫人との交情が問題になりだしたのは、夫人がミュン
スターに出かけるまえであつたようである。サント・ブーヴは、夫人のミュンスター行き以前にマルシャツク公がロング
ヴィル夫人にある印象をあたえ、かれもまた夫人からある印象をうけていた、というふうに書いてゐる。（*Sainte-Beuve* :
Portraits de Femmes, Madame de Longueville.）

ヴィクトール・クーザンはこの兩人が恋愛に陥つた時期を、一六四七年の末か一六四八年の始めと推定している。（*La
Jeunesse de Mme de Longueville, p. 294.*）

このような告白のために、マルシャツク公はこのリエゾンにおいて非常に悪い立場におかれることになつた。クーザン
は、「これこそ実に哀切な、実に英雄的な恋愛の理由ではないか！コルネイユはその『ル・シッド』や『ポリウクト』にお

いて、こんな恋愛の理由は思いつかなかつた」とマルシャツク公の功利主義を非難している。この点ではマルシャツク公は辯明の余地は無いようだ。これはかれの性格の現れと見てよいかも知れない。かれをよく知つていたセヴィニエ夫人は、一六七六年十月七日に、娘のグリニャン夫人に送つた手紙の中に、「ラ・ロシュフコー氏は子供ののように、ヴェルツィユや、むかし楽しく狩りをなさつた場所などを見に行かれました。むかし恋愛をなさつた場所とは言いませんよ、あのかたは恋愛なんでものを一度だつてなさつたことがあるとは信じられませんからね。」と書いています。

しかしマルシャツク公も単なる政略としてロングヴィル夫人をねらつたわけではなかつた。夫人がどんなに魅力のある女性であつたか、この機会に少しかの女と同時代に生きていた人々の証言を聞いておかう。

ド・レス枢機官 cardinal de Retz はフロンドの乱の一方の立役者であつたし、ひそかにロングヴィル夫人の愛を得たいと願つた野心家の一人であつた。かれはもちろんラ・ロシュフコーとは犬猿のあいだであつた。このレス枢機官が夫人のことを次のように書いてゐる。

ロングヴィル夫人について言うならば、痘瘡がかの女の天成の美しさの花を奪つていた。しかしその輝きはほとんど完全に残つていて、それがかの女の身分や、かの女の才気や、かの女の独特の魅力となつていたもの憂げな様子と結びつて、フランスでもつとも愛すべき女性の一人となつてゐた。(V. Cousin: *La Jeunesse de Mme de Longueville* p.7.)

レス枢機官が書いてゐる「もの憂げな様子」*langueur* というものが、ロングヴィル夫人の大きな魅力であつたらし

30. レスはその備忘録の別のところで、

かの女にはその動作に一種のものがあつて、これはかの女より以上に美しかつた婦人たちのきらびやかさよりも心を動かすものがあつた（Ibid. p.7—8.）と書いています。次にモットヴィル夫人の備忘録から引用しよう。

ロングヴィル夫人はこの方法で（その才気とその財力とによつて）ひとびとの魄を支配していたのだが、かの女の美貌の力もこれに劣りはしなかつた。というのが、かの女は摂政時代になつてから痘瘡にかかり、その膚の色つやの完全さをいくぶん失つたけれども、かの女の魅惑のすばらしさは、依然としてかの女を見るひとびとの心をとらえた。とくにかの女はイスパニア語の donayre, brio, y byzarria（様子のよき、あだつばい様子）という言葉であらわすものを、最高度にもつていた。かの女の体軀はすばらしく、そのなやかな風情はわたしたち女性までも魅惑するものがあった。かの女に会つて、かの女を愛さないことは、不可能であつたし、かの女に好かれたいと願はないことは不可能であつた。（V.Cousin: *La Jeunesse de Mme de Longueville*, p. 8.）

要するにマルシャツク公としては、恋と野心と虚栄との髣髴した心情で、ロングヴィル夫人にひかれていつたものであらう。

（未完）